

“Co-production in primary schools: a systematic literature review”

「小学校における協働：文献のシステマティックレビュー」

Marlies Honingh, Elena Bondarouk, Taco Brandsen

Abstract

協働とは、サービスの設計及び供給における市民の参加である。小学校において、協働は親が教師と一緒に子どもの教育上の成長を改善するために取り組むことを意味する。本論文では、どのような研究が実施されてきたのか、どの程度まで小学校における協働の有効性に関する証拠が存在するのかを明確にするために、小学校における協働に関する文献のシステマティックレビューの結果を提示する。文献の選別に関する3つの連続する段階を経て、データベースにあった最初の3121本の論文から、綿密に分析する対象を122本に減少させた。一般的に、教育における協働では特定の集団に対象を定める傾向があるため、成果の一般化が困難となるが、いくつかの研究成果はより一般的に応用可能なものとなっている。協働は生徒の知識の習得を改善するように考えられる。また、親と教師の関係は複雑で不明瞭になり得るものの、教師に対する訓練が協働の改善のための有効な手段になるように考えられる。

Points for practitioners

- 学校における協働はますます普及しつつあるが、ほとんどは社会経済上の特定の集団に照らして検証されてきた。主流の方法として機能するか否かを知るためには、更なる検証が必要になる。
- 学校における協働には、それぞれに合わせた個別のアプローチが必要になる。特定の文脈に順応した場合にのみ、学校における協働が有効になることを証拠が示している。したがって、単一の現象として学校における協働について語ることは誤りがあり、学校における協働には多くの異なる形式が存在する。
- 教師に対する訓練を調査することが最初の抵抗の克服において役に立つことがわかる。